

ダニエル書 - ナンバー・セブン

七人の王

Jeff Pippenger

2023-12-02

七つの雷は、1798年から1844年10月22日までの歴史を表している。その歴史は、ユダ王国の最後の七人の王、すなわち紀元前677年のマナセから紀元前586年のゼデキヤまでによって象徴されていた。

聖なる改革の流れにおいて、第一の天使が力を与えられることの特徴の一つは、世界的であることを指し示す象徴である。1840年8月11日、第一の天使のメッセージは力を与えられ、そのメッセージは世界中のすべての宣教拠点へと伝えられた。

「1840~44年の再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一天使の使命は、世界のすべての宣教地に伝えられた。」『大争闘』611頁。

その時、預言的には、黙示録10章の天使が降りてきて、片足を地に、もう片足を海に置いた。ホワイト姉妹は、それをメッセージが全世界的に及ぶことを示す象徴だと見なした。

「天使が片足を海に、もう片足を陸に置いている姿勢は、そのメッセージの宣べ伝えが広大な範囲に及ぶことを示している。これは広大な海を越えて他の国々でも宣べ伝えられ、さらには全世界にまで及ぶであろう。」『セブンスデー・アドベンチスト聖書注解』第7巻、971頁。

キュロスの第一の勅令の布告は、全世界に及ぶ勅令であった。

さて、ペルシアの王キュロスの第一年に、主がエレミヤの口を通して語られた御言葉が成就するために、主はペルシアの王キュロスの霊を奮い立たせた。そこで彼はその全王国に布告を発し、また文書にもして、こう言った。「ペルシアの王キュロスはこう言う。天の神である主は私に地のすべての王国をお与えになり、ユダにあるエルサレムで、彼のために家を建てるよう私に命じられた。あなたがたのうち、彼の民に属する者はだれでも、その神がその者とともにおられるように、ユダにあるエルサレムに上り、エルサレムにあるイスラエルの神、主の家（彼こそ神である）を建てよ。どの場所に寄留していようとも、そこに残る者には、その場所の人々が、エルサレムにある神の家のための自発のささげ物に加えて、銀と金、財貨と家畜をもって彼を助けよ。」そのとき、ユダとベニヤミンの家長たち、祭司たち、レビ人たち、すなわち神がその霊を奮い立たせたすべての者が、エルサレムにある主の家を建てるために上って行くために立ち上がった。エズラ記 1:1-4。

1840年8月11日に第一の天使が世界中のあらゆる宣教地にもたらされたのと同様に、キュロスは第一の勅令を公布する際、自らを「地上のすべての王国の王」と称した。ホワイト姉妹が「イエス・キリストにほかならないお方」だと述べる黙示録10章の天使の降臨は、黙示録18章の力ある天使と同じ預言的特質を備えている。ホワイト姉妹は、第一の天使

の目的が黙示録18章の天使の目的と同一であると述べている。

イエスは力ある御使いに、地上に降りて地に住む人々にご自身の再臨に備えるよう警告することをお命じになった。御使いが天でイエスの御前を去るとき、きわめて明るく栄光に満ちた光が彼に先立って進んだ。私は、彼の使命はその栄光によって全地を照らし、来たるべき神の御怒りを人々に警告することであると告げられた。『初期の著作』245ページ。

第一の天使の力づけは、世界的な要素を強調する象徴である。キリストの時代の第一のメッセージは、キリストの洗礼の際に力づけられた。聖書は、イスラエル中の人々がヨハネのメッセージを聞くために荒野へ出て行ったと述べている。

そのとき、エルサレムとユダヤ全土、さらにヨルダンの周辺一帯から人々が彼のもとに出て行き、ヨルダン川で彼から洗礼を受け、自分の罪を告白した。マタイ 3:5、6。

キリストの宣教活動は古代イスラエルを対象としており、その預言的な意味においては、世界全体がキリストの洗礼の場であるヨルダン川へと引き寄せられた。とはいえ、洗礼という儀式と、キリストが洗礼を受けたときそれが意味していたことは、全世界に向けられていた。

エホヤキムという名は「神は立ち上がる」を意味し、キリストのバプテスマにおいて、ヨハネがキリストを水の中から引き上げたとき、水の墓場から「立ち上がる」という象徴が、その力づけの一要素となった。すでに引用したエズラ記の最初の四節に続き、五節は、「そのとき、ユダとベニヤミンの父祖のかしらたち、祭司たち、レビ人たち、ならびに神がその霊を奮い立たせたすべての者が、エルサレムにある主の宮を建てるために上って行くべく、立ち上がった」とのことばで、布告を聞いた者たちの応答を示している。第一のメッセージに力が与えられるとき、エホヤキムという名が示すように、立ち上がりが起こる。

2001年9月11日、第三天使の力強い運動の第一のメッセージは、第一天使の力強い運動の第一のメッセージが強められたことを型として示されているように、強められた。ホワイト夫人は、その日に起きたツインタワーの崩壊について述べている。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そこでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

十四万四千人の歴史において第一のメッセージが力づけられたとき、主は「立ち上がり」「地を激しく揺り動かす」ために動かされた。エホヤキムという名は第一のメッセージの力づけを象徴している。1840年8月11日、主は御座から立ち上がり、地に降りて、陸と海の上に立たれた。キュロスの最初の勅令のとき、忠実な者たちは立ち上がった。エホヤキムは、第一の天使の到来を象徴するだけでなく、第一の天使の力づけも表している。

エホヤキムは、最後の三人の王のうち最初の王に当たるが、同時に、エルサレムの滅亡に至る七人の王のうち五番目にも当たる。その七人の王の名は非常に示唆に富む。その七人の王は、マナセ、アモン、ヨシヤ、ヨアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤである。

ミラー派の歴史では、マナセは1798年の終わりの時を象徴している。マナセという名は「忘れさせる」を意味し、ツロの娼婦が七十年間忘れられるのは1798年である。マナセは最も邪悪な王の一人であり、考慮すべき預言的な特質を備えている。

ユダの最後の七人の王は、1798年から1844年10月22日に至るまでの七つの雷の歴史を表している。マナセはその七人の王の最初であり、七人の最初の王として、七人の最後の王であるゼデキヤを象徴していた。イエスは常に、初めによって終わりを示される。七人の最後の王であるゼデキヤは、バビロン捕囚の奴隷状態へと連行された。この最後の七人の王のうち最初の王もまたバビロン捕囚に連行され、最後の王がバビロン捕囚に連行されることを象徴していた。

主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞き入れなかった。そこで主はアッシリア王の軍勢の長たちを彼らの上に来させ、彼らは茨の中でマナセを捕らえ、足かせをはめ、バビロンへ連れて行った。彼が苦難の中にあつたとき、彼は自分の神、主に助けを求め、先祖の神の前に大いにへりくだり、彼に祈った。主は彼に心を動かされ、彼の嘆願を聞き入れ、彼をエルサレムにある彼の王国へ再び連れ戻した。そのときマナセは、主こそ神であることを知った。歴代誌下 33:10-13。

マナセが主が神であることを知るようになったのは、いったん王位を失い、のちに王位に復帰したからである。ネブカドネザルもまた、マナセと同様に、王位を失い、その後には復帰して主を知るようになった。

その日数の終わりに、私ネブカドネツアルは天に目を上げ、正気が私に戻った。私はいと高き方をほめたたえ、永遠に生きておられる方を賛美し、尊び、あがめた。彼の支配はとこしえの支配であり、その国は代々に至る。地に住むすべての者は無に等しいと見なされ、天の軍勢の中でも地の住民の間でも、彼は御心のままに事をなさる。彼の手をとどめる者はなく、また彼に「あなたは何をしておられるのか」と言い得る者もない。同じ時に私の理性が私に戻り、私の王国の栄華のために、私の威厳と輝きが私に戻った。私の顧問たちと諸侯が私を求めて来た。私は私の王国において再び確立され、さらに大いなる威厳が私に加えられた。今や私ネブカドネツアルは、天の王を賛美し、ほめたたえ、あがめる。そのすべての御業は真実で、その道は裁きである。高慢に歩む者を、彼は低くすることがおできになる。ダニエル書 4:34-37

マナセの経験はネブカドネザルにおいて成就した。マナセは、ユダの最後の三人の王の歴史における「終わりの時」と、捕囚七十年の預言の到来を表している。ネブカドネザルは

、三つの勅令の歴史において「終わりの時」を表しており、ちょうど1798年が七つの雷の歴史における「終わりの時」であったのと同様である。先に引用した節では、「日々の終わり」にネブカドネザルの理性が戻った。この「日々の終わり」は、ダニエル書12章にも言及されている。

しかし、あなたは終わりが来るまで自分の道を行きなさい。あなたは怠い、やがて日々の終わりには、あなたに定められた分に立つことになる。ダニエル12:13

ダニエル書第十二章の「日々の終わり」は「終わりの時」である。というのも、ダニエルは「終わりが来るまで行け」と告げられたからである。その時、ダニエルは「自分の割り当てに立つ」ことになる。「自分の割り当てに立つ」とは自分の目的を果たすことを意味し、ダニエルは、日々の終わり、すなわち「終わりの時」に彼の書の封印が解かれたときに、それを果たした。その時には、賢い者が理解する「知識の増加」があるだろう。ネブカドネザルの日々の終わりに、彼の「理解力」が彼に戻った。

「神が人に特別な働きを委ねられるとき、その人はダニエルがそうしたように、定められた分と持ち場に立ち、神の召しに応えるべく備え、御旨を成就するべく備えていなければならない。」『原稿集』第6巻、108ページ。

マナセは、ユダ王国の最後の三人の王の歴史における「終わりの時」を表し、ネブカドネザルは三つの勅令における「終わりの時」を表す。マナセの後には彼の子アモンが続いた。

アモンは「訓練」を意味し、封印が解かれたメッセージにおいて「賢い者」を訓練するための「知識の増加」があった時期を表している。その後、アモンに続いたのはヨシヤであり、七人のうち、複雑ではあるが比較的良好な預言的歴史を持つ唯一の王である。

ヨシヤは「神の礎」を意味し、「終わりの時」に封印が解かれた真理の確立を表している。アモンによって象徴された知識の増加は、ガブリエルや他の聖なる天使の導きによって、ウィリアム・ミラーがまとめ上げた。ミラーの働きは、彼が運動の礎を据えたため、ヨシヤという名によって表されている。ヨシヤについて語るべきことはまだ多くあるが、彼の子エホアハズに進もう。

エホアハズは二十三歳で王となり、エルサレムで三か月間治めた。彼の母の名はハムタルで、リブナのエレミヤの娘であった。彼は、先祖たちがしたすべてのことになって、主の目に悪とされることを行った。ファラオ・ネコは、ハマテの地のリブラで彼を縛り、彼がエルサレムで王位につくことのないようにし、またその地に銀百タラントと金一タラントの貢を課した。ファラオ・ネコは、ヨシヤの子エルヤキムをその父ヨシヤに代えて王とし、その名をエホヤキムと改め、エホアハズを連れ去った。彼はエジプトへ行き、そこで死んだ。列王記下 23:31-34

ジェホアハズは「ヤハウエが捕らえた」を意味し、彼はファラオネコに捕らえられた。ヨシヤの子であるジェホアハズはファラオネコに捕らえられ、「高める神」を意味する兄弟のエリアキムに取って代わられた。次いでファラオネコはエリアキムの名を「神が立ち上がる」を意味するジェホイアキムに改めた。名の変更は契約関係の象徴であり、第一のメッセージに力が与えられる時、神はある民と契約を結び、同時に以前の契約の民を通

り過ぎる。

1840年8月11日、三百九十一年と十五日のあいだ解き放たれていた四つの風によって表されていたオスマン帝国は抑制され、すなわち、エホアハズの名が意味するように「捕らえられた」。同時に、エリヤキムが王とされ、その名は「神は立ち上がる」を意味するエホヤキムに改められた。エホヤキムの後は、その子のエホヤキンが後を継いだ。彼は聖書の中で三つの名前を持っている。

ヨヤキンという名は「主を立てて確立する」という意味である。彼はヨヤキムの子であり、神が新たな真のプロテスタントの角を「立てて確立した」1844年の春における第二の天使の到来を示している。第二の天使のメッセージは「真夜中の叫び」のメッセージによって強められ、エコニヤとコニヤは「神が確立する」という意味である。同じ意味を持つこれら三つの名は、真夜中の叫びが第二の天使のメッセージに結びつくことを表している。十四万四千人が封印されるのは、大いなる叫びの期間における聖霊の最後の注ぎの時である。十四万四千人の封印はミラー運動の真夜中の叫びにおいて型で表されており、エコニヤ、コニヤとも呼ばれるヨヤキンは、その封印の象徴である。

「わたしは生きている」と主は言われる。たとえユダの王エホヤキムの子コニヤが、わたしの右の手の印璽であっても、わたしはそこからおまえをもぎ取る。わたしはおまえを、おまえの命をねらう者たちの手に、おまえが恐れる者たちの手に、すなわちバビロンの王ネブカドレザルの手に、またカルデヤ人の手に渡す。わたしはおまえと、おまえを生んだ母を、おまえたちが生まれなかった別の国へ投げ出す。おまえたちはそこで死ぬ。しかし、彼らが帰りたいと望むその地へ、彼らは帰ることはない。この人コニヤは、侮られた砕かれた偶像なのか、好まれない器なのか、なぜ彼とその子孫は追い出され、彼らの知らない地に投げ込まれるのか。

地よ、地よ、地よ、主の言葉を聞け。エレミヤ書 22:24-29。

ヨヤキン、エコニヤ、コニヤは、第二の天使のメッセージに真夜中の叫びのメッセージが加わる封印の時を表している。彼は愚かな者たちの封印の時を表している。悪しき王は、封印の時に獣の刻印を受ける運命にあり、主の口から永遠に吐き出されるラオデキアの愚かな乙女たちを表している。

神の右の手にある印章はその御印であり、十四万四千人の封印の際に主の口から吐き出される者たちは、「七つの時」の下げ振りを手にしていた男であるゼルバベルと対照される。

ユダの総督ゼルバベルに告げよ。「わたしは天と地を揺り動かす。わたしは諸国の王座を覆し、異邦の諸国の勢力を滅ぼす。わたしは戦車とそれに乗る者を覆す。馬もその乗り手も倒れ、皆、それぞれ兄弟の剣に倒れる。」その日には、万軍の主は言われる、「わがしもべ、シェアルティエルの子ゼルバベルよ、わたしはおまえを取り、印章の指輪のようにする。わたしはおまえを選んだからだ」と万軍の主は言われる。ハガイ書 2:21-23

「『七つの時』である『つまずきの石』は、ゼルバベルの手にある『下げ振り』であり、彼は、神が十四万四千人に印を押すために用いる『印璽』として表されている。その印璽、すなわち『しるし』は、エルサレムで行われている忌むべきことのゆえに『ため息

をつき、嘆き叫ぶ』者たちに押される。そのため息と嘆きは、封印される者たちの経験を特徴づけ、『七つの時』という救済策に対する彼らの内的な反応の象徴である。それは自分たちの罪と父祖の罪を告白することである。すなわち、2020年7月18日の失望以来、彼らが神とともに歩まず、また神も彼らとともに歩んでこなかったことの認識である。それは、フィラデルフィアがラオデキアへと移行しつつあった時期である1863年に失敗した試験である。これは、コニヤに代表される者たちが愚かなラオデキアの乙女として永遠に確立され、ゼルバベルに代表される者たちが賢いフィラデルフィアの乙女として永遠に確立される時期を象徴していた。」

ジェホイチンの後には、七人の王の最後であるゼデキヤが続いた。マナセが1798年と「終わりの時」を表しているので、ゼデキヤは、幻が「語り、偽らない」ことになる1844年10月22日を表していなければならない。ゼデキヤという名は、ヘブライ語の二つの語を組み合わせてできている。一つは「エホバ」であり、もう一つはダニエル書8章14節で「清められる」と訳されている語である。ゼデキヤは、1844年10月22日に始まった神の神殿の清めを意味する。

ユダの最後の七人の王は、1798年から1844年10月22日までの漸進的な歴史を表している。ヨヤキムは1840年8月11日の象徴であり、それはさらに2001年9月11日を表している。彼は第一の天使のメッセージが力を受けることの象徴であり、彼はダニエル書1章1節に登場する。したがって、ダニエル書1章の背景と文脈は、黙示録10章に示されているように、第一の天使のメッセージへの力の付与である。黙示録10章では、キリストが手に小さな巻物を持って下って来られ、ヨハネはそれを食べるように命じられた。これが、ダニエル書での最初の試しが食べることに関わっている理由である。

これらのテーマは次回の記事で引き続き取り上げます。

そして彼はわたしに言われた、「人の子よ、わたしがあなたに与えるこの巻物を腹に食べ、これをもってあなたの腹を満たせ。」そこで、わたしはそれを食べた。するとそれは、わたしの口には蜜のように甘かった。エゼキエル書 3:3